

## 図書館員の四季

### 発展途上国に思うこと

市立砺波総合病院 津田はるえ

病院図書室の仕事に就いてもうすぐ3年になります。最初の1年間は週3日の勤務でしたが、2年前から病歴室と兼務ですが毎日の勤務になりました。毎日図書室にいますと今まで以上に、利用する人、雑誌や本の購入希望を出す人、文献集めもどうしてよいかわからず悩みを抱えていたと言ってくる人などの多いのに驚き、図書室司書の必要性を感じました。専門用語などで相談を受けた時は、私の勉強不足で何もわからず、度々、穴があったら入りたい気持ちになり、その時になって辞書を引いている有様です。もっと勉強しないといけないと思いながらも、日々の仕事に追われ、ただただ忙しい毎日なのです。

そんな中、一週間ネパールに行ってきました。知人がいるのですが、家族に病人がいるというので訪ねていくと、祈禱師が来ていました。中流階級の家庭なのですが、病院は高くてなかなか行けないらしいのです。しかし、衰弱がひどいので病院に行くよう勧めると、四日間入院していました。毎日仕事とはいえ病院に来て、大勢の外来患者・入院患者を見ているのですが、病気なのに医者に掛かれないうまくさんの人がいることに戸惑いました。町には、病気で手足の無い人が物乞いをしていたり、学校へ行けない子供が大勢いて大変さを肌で感じる日々でしたが、何とも魅力的な国でした。エネルギーであり、子供たちの目の輝きを思い出すと、日本での忙しい日々には疲れたらまた行きたくくなります。

### 近頃つらつら思うこと

神戸市立中央市民病院 赤江妥貴子

この図書室に居座ってそろそろ1年近く経とうとしています。学生時代はずっと体育会系の部に所属しており(屋外の競技ばかり)いつも日に焼けて飛び跳ねておりました。その姿しか知らない友人たちは、「図書室=知的センス溢れる空間でしょ。その知的な静寂の中に溶け込むあなたの姿は想像できない。」と申します。(私のイメージにピッタリのはずなのに。けれど図書室の業務は分厚い本の中の整理整頓など、結構体力も使うのですよね。)

確かに入室される方々はこの空間で何か知的なものを得ようと足を運ばれます。そのため図書室は文献・資料など、知識・情報の宝庫でなくてはなりません。今の私にその方々の期待に添えるようなサービスがどれほどできているかを考えると、本当に恥ずかしくなります。

引き継ぎのほとんどない状態で今までとは全く畑違いの職場に就きました。訳の判らぬまま1年が終わり、2年目に入ろうとしています。顔馴染みの先生方や看護婦さんも増え、私にとっては居心地の良い空間となってきましたが、今後は知的空間を求めて入室される方々の居心地の良い場所となれるよう、日々努力していきたいと思う今日この頃です。

(立派な司書への道はまだまだ果てしなく遠そうです)